『源氏一時話』（架蔵・天保十二年奥書）―解題と翻刻―

妹尾好信

【キーワード】 源氏一時話、源氏物語絵尽大意抄、源氏物語梗概書

解　題

最近、外題に『源氏一時話』とある少々珍しい『源氏物語』の梗概書を入手した。と言っても、実は中身は天保八年（一八三七）和泉屋市兵衛板の『源氏物語絵尽大意抄』であって、この版本自体はまったく珍しい本ではない。同書は江戸時代後期に刊行された数ある『源氏物語』啓蒙書の一つで、「李園主人」なる者の序文末尾に、「五十四帖の繪を写し。画上に一首のうたをあげて児童の眼にふれなば。聊物語のゆゑよしをしるたよりならんか」とあるように、一面に一巻をあてて物語の場面を描いた絵を掲げ、絵の上部に源氏香の文様と巻名、巻中の和歌を一首記す。そして上欄に『源氏物語』に関する講釈を載せている。巻頭に近江八景を描いた見開き二面の彩色口絵がある。見返し題によれば、絵は渓斎英泉によるものである。絵を中心に、作中の和歌と頭書の解説によって手軽に『源氏物語』についての知識を得ることができる気のきいた入門書である。縦一八・〇㎝×横一二・二㎝というコンパクトサイズの中本で、全30丁という簡便さもあって、読者に迎えられたものとおぼしい。

ところが、架蔵本は、約二倍の58丁の本文を有するのである。どうしてそうなるのかというと、1丁おきに手書きで各巻の梗概を記した文章を1丁ずつ綴じ込んであるからである。手書き部分は28丁あるので、本来の版本部分と合わせて58丁になる。最初の1丁は表裏に桐壺巻の梗概を記し、以下は1面に1巻ずつ梗概が記される。最終丁の裏には夢浮橋の巻名の由来の考証と、天保十二年（一八四一）閏正月、「むめ園の主」の奥書が記されている。言ってみれば、版面と手書きの面が交互に現れるという版本と写本が均等に交じった特異な形態の本なのである。

手書きの丁は、袋綴の表（おもて）面には前丁裏の版面にある巻の梗概が、裏面には次丁表の版面にある巻の梗概がそれぞれ記される。1面10

行書き、1行は25文字前後なので、各巻の梗概は約250字前後でまとめられている（桐壺巻だけは倍の約500字）。若菜上・下巻のような長大な巻も、花散里や篝火のような短い巻も同じく一面に書かれるので、梗概の密度には濃淡があるが、これだけ短い字数で『源氏物語』各巻の梗概を記すのは容易なことではなかろう。それでも、梗概は簡にして要を得ていて、なかなか手際よく作成されていると言ってよい。なお、版面の画中には人物名を書き入れてある。

梗概の特色としては、女性登場人物への関心が強いことが挙げられる。箒木巻では雨夜の品定めの内容についての紹介はなく、すぐに光源氏と空蝉の出会いを語る。空蝉巻はもとより夕顔巻でも空蝉との交渉を丹念に記している。その中で軒端の荻との関係もちゃんと記している。藤壺・紫の上・明石の君ら主要人物にとどまらず、源内侍などまで光源氏が関係を持った女性についてはほぼ漏らさず書かれているように見える。おそらくこの梗概の読者に若い女性を想定して書かれたためだろう。

主人公光源氏は、はじめ「源氏」と記されるが、桐壺巻の終盤からは「源」と略称される（御法巻に一箇所「六条院」の呼称がある）。夕顔を連れ出した廃院を「河原院」と記し、そこに現れた物の怪を「御息所の怨霊」と明記している。若紫巻では、藤壺の懐妊には触れるが、源氏との逢瀬には言及しない。

明らかな誤りもある。桐壺巻で源氏が元服と同時に中将になったと書いているのは間違いで、同巻末尾に「此巻には御誕生より十四五までの事見へたり」とあるのも正確でない。また、蓬生巻で末摘花をわが娘の侍女にしようと企てたり乳母子の侍従を連れ去ったりする人物を「末摘花の御母」とするが、物語には「母北の方のはらから」とあるので、おばである。匂宮巻に「三の宮を兵部卿の宮といふ。紫の上の里の家也」とある説明も意味不明である。

このように多少の疵があるとは言っても、総じてこの梗概を記した人物の『源氏物語』理解はかなりのレベルであると言える。著者である「むめ園の主」がいかなる人物なのか管見に入らないが、相当『源氏物語』に親しみ、造詣の深い人であったと思われる。中世以来、『源氏物語』にはさまざまな梗概書が作られているが、ここまで少ない文字数で物語の筋を大きな不足なく記したものは稀有なのではないかと思われる。ここに梗概部分の全文を翻刻して紹介することにした所以である。

本書は、いかにも手作り感のある本で、おそらく「むめ園の主」が、身近な女児に与えるために工夫して作成した『源氏物語』入門書なのであろう。もとの版本が絵と和歌一首のみで、各巻のあらすじがないのを不足に思ったためだろう。外題「源氏一時話」は、版本の題簽をはがした跡に手書きされている。「一時（ひとときぁ）で『源氏物語』がわかる話」の意であろう。見返し題がやや無造作に破り取られているが、それはもとの版本の題名を隠すためだったかと思われる。しかしながら、梗概を加えることによって、もとの書名『源氏物語絵尽大意抄』にふさわしい内容の本になっているのである。

二

翻　刻

〔凡　例〕

一　架蔵の『源氏一時話』の筆写部分（天保十二年〈一八四一〉奥書）に記された『源氏物語』の梗概を翻刻した。

一　翻刻にあたっては、次のような処理を施した。

1　変体仮名は、すべて現行の字体に改めた。漢字については、できるだけ原本の字体を尊重したが、特殊な異体字は通行の字体に改めた。

2　底本にある振り仮名は、疑問のあるものも含めてすべてそのまま翻刻した。稀にある行間注記もそのまま翻刻した。

3　底本の仮名には濁点が時々付されているが、そのまま翻刻した。

4　通読の便宜を考慮して、底本にない句読点を私に補い、会話文や心内文、和歌や歌謡の引用部分には「　」を付した。

5　底本の誤写や脱字かと考えられる箇所には、右傍に「〈ママ〉」「（〇カ）」「（〇脱カ）」のように注記した。

6　虫損により判読できない文字は□で示し、推測できる場合は右傍に「（〇カ）」のような形で想定される文字を注記した。

一　『源氏物語』の巻名の表記は版本部分のそれに従った。ただし、振り仮名は省略した。

源氏一時話　全（外題・打付書）

桐壺

いづれの御時にか、大裏ニ桐壺とて心さまゆうにおはしける更衣あり。帝の御寵愛なゝめならす。弘徽殿の女御を初め、此更衣をそねみ給ひけり。弘徽殿は右大臣の娘にて、殊に一の宮の母公なれは、餘情重き人なり。更衣の御はらに生れ給ふ源氏、御年三ツの夏、更衣病氣重く、御暇申て里江下り給ふ。再々御使行とふ内、更衣はかなくなり給ひ、御使帰りて奏す。帝御涙にくれさせ給へり。源氏は御忌の内は更衣の母君に預けさせ給ふ。風あら〳〵しく吹く夕暮ニ、靱負の命婦といふ女御使ニ遣はされ、源氏の御様躰をよく見せさせ給ふ。更衣の手なれし櫛箱など、母君かたみ心に命婦にやり給へり。源氏御忌あきて内裏へ帰り給ふ後、唐の相人見奉りて、唯人ニ而御後見させ給はゝ、天下のどかならんと奏す。御かたちをめでゝ光る君と号しぬ。帝は更衣のこと忘れ給はす。先帝の四の宮似させ給ふゆへ、入内させ給ひぬ。藤壷の女御といふ。源氏稚より十二にて御元服、只人に成り給ひ、中将御位にて、左大臣をゑぼし親となし、其姫君を北の方に定め、其夜左大臣の御許へ渡り初め給へり。此姫君を葵の上といふ。源とは従弟にて、御歳十六にて四ツまさり給ふ。源は藤壷御方を心にかけ給へり。此巻には御誕生より十四五まての事見へたり。

箒木

五月の雨夜品さだめ物語の後葵の上へ渡り、御方違の為め紀伊守の許江おはす。西の方座敷ニ而源の忍びあるきの事を立聞し給ひ、御心にかゝりて寝られ給はねば、そと起き出てしのび入て、空蟬をさま〳〵にかたらひ給へと、つれなく、夫より空蟬が弟を呼よせ、御傍におき、よくの給ひ含めて、御使に文かよはし給ふ。其後も渡り給ひけるが、空蟬ふし所をかへて逢ひ奉らず。源さま〳〵恨み給ひける。空せみは伊豫の介が後の妻、紀伊守が為めには継母なり。伊豫の介謹む事ありて、空せみ親子とも紀伊守が許に引こし居けるなり。

空蟬

空蟬か弟小君ニ何とぞ引合させよと源かたらひ給へは、紀伊守の國ニ下りたるひまに、ある夕暮、源を車にのせて空蟬か方へ行ける。源格子のひまよりのぞき給は、空せみと軒端の荻と碁を打て居ける。打はて、親子一所にふしぬ。源入り給へは、空せみそと起き出てかくれぬ。娘軒端の荻はよく寝入りぬ。源は一人とおぼし寄り給へは、娘はあきれまどひければ、人たがへとの給はんはあしければ、御こゝろざしのやうにかたらひ、蟬のもぬけたるやうに空蟬かぬき置たりし薄衣をとりて帰り給ひぬ。

夕顔

源六条へ渡り給ふ序に大貳の乳母へ立寄り給ふ。隣り家に夕貟の花さきけるを折らせ給へは、童扇にのせて奉る。端に歌あり。御覧じ御返しなり。惟光に問はせ給へは、揚名の介が家なり。其後再〻しのび給ひ、十五夜にとまり給ひ、暁方夕貟と召遣ひ右近とも車ニのせて河原の院へおはしとまり給ふ。其夜御息所の怨霊出でゝ夕貟ははかなくなりぬ。おさなき娘あり。三ツになりなりぬ。伊豫の介娘軒端の荻は殿上人少将を聟にとり、源あやしと思はんと思し、歌よみ遣はさる。伊豫の介妻空蟬を引具して國へ下る。源夕貟にわかれ空蟬さへ下るゆへわびしく思し、空蟬へもぬけの小袖ニ櫛扇そへてかへし遣はし給いぬ。

若紫

源瘧を煩らひ給ひ、北山の聖の許江渡り給ひ、夕暮小柴垣今のそき給へは、四十ばかりの尼の傍に十ばかりの美しき童、雀の子逃したりとて、顔すり赤め居たる。其顔藤壷の方によく似たるゆへ、其夜僧都ニ問せ給へは、僧都の妹ハ按察大納言の後家にて、兵部卿のかよひて出きたる孫女なりと。夫今尼君ニ預らんとの給ひけれど、合点し給はず。其後尼は失給ひけるゆへ、兵部卿よび取らんとし給ふ。暁方に源おはして、車にのせ帰り給ふて西の對に住せ、御娘のようニいとおしみかしづきたまへり。此娘紫の上也。父兵部卿と藤壷と

ははらからなり。其頃藤壷少し悩み給ふといへと、御懐妊の御心地なり。

末摘花

源夕臾にあへなく別れ、忘れがたく思ける。左衛門の乳母の娘命婦、故常陸の宮の姫君の御事かたりければ、源氏ゆかしうおぼし、媒せよとて文つかわせる。終にいゝより給ひて見給へは、御顔鼻長く赤くて、普賢菩薩の乗りもの、象の如し。かゝる人に逢ひ初めたる悔しと思せど、我ならで誰か見しのばんと念頃に育み給へり。此君を末摘花といふ。あるとき源紫の上と雛あそびし、鼻の先へ紅粉を赤く付て見せ給へは、紫の上いみじく笑ひ、染つかんとあやうがり、寄りて拭ひ給へは、「平中がやうに彩そへ給ふな、赤からんはよし」と戯れて笑ひたまいぬ。

紅葉賀

帝五十の御賀、十月紅葉盛りにあり。源紅葉をかざしに青海波を舞ひ給ひ、相手に頭の中将立給ふ。花の傍の大山木のようニ見へしとかや。源我舞を御覧しつらんと藤壷へ御哥よみ遣はさる。藤壷此頃若君を産み給ふ。実は源の御子なれど、帝露ばかりも知り給はす愛し給ふ。藤壷は人やあやしまんとくるしがり給ふ。其頃源内侍とて五十七八の女へ言ひよる人おゝし。源たはむれ近き給ふ。頭の中将おどろかし給。帝御位を一の宮に譲り、藤壷の産せ給ふ若君を春宮ニすへ、藤壷を中宮になし給ふ。弘徽殿いとゞ藤壷を悪みたまいける。

花宴

南殿の櫻盛りなれは、花見の御遊あり。源頭の中将舞ひ給ふ。去りぬへきひまもありと源立出給ひ、藤壷をうかゞふ。弘徽殿の廊を通り給ふに、若き女、「朧月夜にしく物はなし」と口すさむ。源ふと袖をとらへて引く。女驚きけれど、少し心のどめ給ふ。女と扇かわして暁方別れ給ふ。此女君、六の君とて弘徽殿の御妹にて、春宮の女御に参らせんと呼ひ給ひたる也。其後藤の花見とて弘徽殿里右大臣江行き給。源も呼ひ給へは、源催馬楽の「扇とられてからきめを見る」と諷ひ給へは、御簾の内に打なけき給ふけしきあり。源さしよりて哥よみけれは、御簾の内より御返しあり。

葵

四月、賀茂の祭見物に葵の上すゝめられ給ひ参りぬ。六条の御息所の御車を御供の人押のけ、恥がましくて、御息所詫し思ひ集め給へり。源は紫の上と一つ車にて見物したもふ。其後御息所いとゞ物おもはしさまさり、葵の上は御物の怪に悩み給ふ。御息所の怨霊なり。葵の上御産ありて、若君なれば、御歓ひ限りなし。左大臣も源も内裏へ参り給ふ御留主に、葵の上かくれさせ給ふ。源四十九日の後、二条へ帰り給ふ。紫の上ハをとなしうおひ立たまふ。或夜新枕し給ひぬ。葵の上かくれ給ひしおりなれは、御祝ひなく、源惟光に「あ

すの夜かず〳〵にはあらて餅ゐを参らせよ」とほゝゑみ給ふ。

榊

六条の御息所、源うとみ思してかれ〳〵ニ成り給ふ。御腹の姫君斎宮になり給ひ、伊勢へ下り給ふゆへ、同しく下り給はんとて、清めの為めに嵯峨の宮に移りおはす。源訪ひ給ひ、榊を折り、かわらぬと聞へ給へは、御返しあり。夜一よ語り、暁近く帰り給ひぬ。帝別れの櫛を斎宮へ遣はし給ふ。其後院の帝少つゝ悩せ給ひ、源に「春宮の御後見し給へ」と遺言し、かくれ給ふ。それより後は大后と右大臣政を御心の侭に行ひけり。源藤壷に再〻恨ミ給ふニより、心くるしう、御髪おろし給ふ。朧月夜の内侍瘧を煩ひ、御父右大臣の許へ下り給ひぬ。源夜な〳〵對面し給ふ。右大臣源の居給ふをすきかけちらと見給ひ、ものしう思して大后にかたり、立腹したまい、いとゞ悪み、あだせんと思す。

花散里

この巻の書出しに、「人しれぬ御心づこらの物思はしさ」とは、源の好色ゆへに明くれ物思ひ絶ねば、かく書けり。麗景殿の女御とは、桐壷の帝の女御にて、是も源の御継母ともいふへし。其女御の御妹三の君と聞へしを源いひよりて、折〻かよひたまへり。是も此巻に始めて此人の事は見へたれど、はや往年よりのやうなる意を含みて書けり。此三の君は、五月の時分、源渡り給ひて御哥遣はされたり。この君を花散里といふ。

須磨

源世の中わずらはしく、須磨へおはせんと左大臣へ御暇乞に行き給ふ。暁方帰り、旅のよそおひし、藤壷へも御暇乞にゆき、其夜御父院の御陵へ詣で、明はつる程にかへり、其日□□（虫損）のどかに紫の上と御物語し給ひ、明はてぬ内御舟にて出給ひ、須磨ニつき給ふ。都の御方〳〵御文遣はし給ひ、経よみ画かき手習などし給ふ。明石の良清、入道の娘へ文遣はしけれども、返り事せずありけり。葵の上の御兄頭の中将、御訪ひに須磨へおはしたり。三月初の巳の日、舟に乗りて出給ひ、はらへし給ひ、長閑なる海原俄に荒れたち、雷光り大雨ふりけり。漸〻にして帰り給ひ、のどかに経打吟してまどろみ、夢見たまふ。其さま見へぬ者来て、宮より召すといふ。

明石

雨風なを止ます雷しづまらで、尋來る人もなきに、紫の上より御使下る。雷源の御座の間ニ続きたる樓に落ちぬ。源まどろみ給ふニ、故院此所を去れと夢見給ふ。其暁に明石の入道より御迎ひ來る。源明石ニ渡り給ふ。琴と琵琶を入道と合奏し給ふ。源入道の娘へ文遣はし、心競へに負け給ひ、八月十五夜岡部におはしぬ。都内裏には、帝御眼病にて、御母后も悩み給ふ。帝春宮に世を譲り、執政を源に仰付んこと思す。七月廿日、明石へ御使にてゆるし給ふ宣旨下さる。源

は嬉しきに、又明石の御方に別れんこと思す。入道、別れをかなしみ奉る。娘は懐胎なり。御門出を入道さま〳〵いとなみまうけ送り奉る。

澪標

帝は源を召返し給ひ、御こゝちよくならせ給ひ、御位を譲り、朱雀院と申奉る。二月廿日御即位也。左大臣ニ摂政をなさしめ給ふ。朱雀院の若君を春宮と申奉る。藤壷は入道の宮といふ。源若君を具して住吉へ詣で給ふ。彼の明石の御方も舟にて住吉へまうで給ふ。源御哥を遣はさる。御返しあり。伊勢の斉宮御母御息所も帰り給ふ。御息所程なく失せ給ひ、斎宮を源二条へ引取り給ひ、帝の女御に参らせんと思す。朱雀院もみづからの女御にせんと思すれば、源藤壷に談合して、帝の御後見ごゝろにおとなしき人奉らんと、斎宮を帝の女御に定め給ひけり。

蓬生

源花散里へおはせんとて、雨降りて晴たる夕暮立出給ひ、途に松に藤の咲かゝり、築地も崩れたる家御覧し、思し出して、此蓬生末摘花の御方を訪ひ給ふ。末摘花の御母は受領の北の方に成りて我娘の女房達にて後見の人にせんと再〳〵参り、末摘花ニ申せど、源に頼みかけて動き給はねば、侍従の君いざない筑紫に下る。其おり末摘花、かつらと香を遣はしぬ。源の來給ふときは、假寐の夢に御父を見給ひ、覚しとき惟光案内して源入り給ふ。御哥遣はされ、夫より念比に訪ひ、後には二条近き所を作らせ、それへ移し育しみ給ふ。大貳の北の方築紫より上り、見て驚きおもふ。侍従は心みじかく見捨奉りしを恥しう思へり。

関屋

伊豫の介と云いし人、今は常陸守にてありけるが、空蝉女子引つれて上京す。源は石山に御願ほどきに詣で給ふ。道にて源の御車に逢ひ、女子の車はこゝかしこにかくして、関山におり居てかしこまる。源心に空蝉の事思し出し、其後小君今は衛門佐を召して、空蝉へ哥遣はさる。御返しあり。常陸守は老のつもりて失せければ、うつせみ心細く、継子継母の中なれば苦しき事出くるに、惣領紀伊守恋慕の心見へければ、かくてはいかゞと尼になり給ふ。きのかみ、「おのれを厭ひ尼ニなり給ふか。まだ若ければ残りの齢ひ久し。何として世をわたり給はん」と云ひ、立腹しけり。

絵合

源朱雀院の御心を憚りて、斎宮の親分なれども、さのみ肝入給はず、入道の宮よろづ取もたせ給ふ。斎宮入内し給ふ。御局は梅壷也。帝は十二、梅壷は廿二三なり。頭の中将、今は権中納言の娘、弘徽殿の女御は十三なれハ、御年の程同じければ御中よし。帝繪を好み給ふゆへ、斎宮繪をかき給へは御心にしみ、夫々梅壷へ再〳〵渡り給へ

は、弘徽殿繪をおしみ論じ、心よく御目にかけ給はねば、源聞給ひて、あまた繪を奉り、繪合の御遊あり。源の須磨にてかき給へる繪類なく、斎宮勝ち給へり。夫より合奏の御遊ひあり。源は帝今少しおとなしうならせ給はゝ世を背かんと、山里といふ所へ御堂を作らせ給。公達をそれ〳〵有付みんと思せは、早く世をすて給ひがたし。

松　風

源今は紫の上と一ッにおはしませは、我座所を普請して、花散里、明石、其外手をかけし人を住さんと思す。明石の方京へ上り、大井川の辺に住み給ふ。源しづ心なく渡りたう思し給へとも、紫の上の御心をかねて早くも渡り給はずありけり。源大井へわたり給ひて姫君を見給ひければ、三ツに成りたまへは、片言など愛らしく聞へ給ふ。二三日おはして二条院へ帰り給ひ、紫の上に姫君の御事を語り、「養ひてそだて給へ」とのたまへは、我が子にしてかしづかんと思す。源大井へ渡り給ふことといとかたし。嵯峨の御堂の念佛にかこつけて月二三度ばかり渡り給ふ。嵯峨の御堂とは、繪合の巻に「長閑なる山里に御堂を作り給ふ」とある御堂なり。

薄　雲

明石の御方に「二条院へ移り給へ」との給へど、移り給はず。源姫君を御車に乗せて移り給ひ、紫の上にいとよくなつき給へは、美しきもの得たりとひとおしがり、いだきあつかひ給ふて、明石を妬み

八

給ひし心もなくなり、いかに恋しう思ふらんと思す。太政大臣、藤壺の入道の宮かくれ給ふ。世こぞりておしみ奉る。僧都、帝へ誠は源氏の御子なること奏するにより、位を譲らんと思せど、源うけひき給はざりけれは、牛車を許るさる。源、藤壺の御事さま〳〵思して引籠り泣くらし給ふ。此頃斎宮御里へ下り給ひ、源御對面のふし、「春と秋とはいづれか面白き」と尋給へは、「御母御息所のかくれ給ひしも秋なれは、秋こそあはれニなつかしう侍る」との給へは、秋好む中宮といふ。

朝　顔

加茂の斎院おりさせ給ひ、女五の宮と桃園の宮に住み給ふ。源むかしより御心ざしあり。女五の宮は斎院ニも源にも御叔母なり。此宮を訪ひ給ふにかこつけて再〻渡り給ひ、朝顔の花に御哥そへ遣はし給ふ。人口さがなけれは、源のほんさいニもなり給はんと云ふを紫の上聞給ひ、心うく思す。源斎院にさま〳〵聞へ尽し給へど、つれなき御もてなし也。源負ては口おしと思す。紫の上思ひ乱れ給へは、源「そのみちはもてはなれたる中ぞ。心置給ふな」とかたり慰め給。雪ふり松竹ニつもり、月光合たる空身にしみおもしろけれは、童ニ雪まろばせさせ給ひ、入道の宮、其外逢ひ給ひし方〻の心ばへ、かたちを語り臥し給へは、入道の宮を夢見たまふておそはれ給ふ。

乙女

源は若君の夕霧の御位をひきくして學文をせさせ給ふ。頭の中将今は内大臣の姫君、御母大宮ニ預けられ給ひける姫と夕ぎり、稚き心地に互に思ひかわし給ふ。内大臣此ことをさゝやくを聞き、腹立ち呼取り給ふ。此姫ハ雲井の鴈也。源、五節の舞姫を惟光が娘ニ習はし、大内へ出し給ふ。此娘内大臣の姫雲ゐの厂に似たりければ、夕ぎり御心とまりて文遣はし給ひける。六条へ四丁こめて家を作り、四季の景色になし、秋好む中宮の御里住みの為め、花散里、明石の御方も住せ給ひ、紫の上と源とは春を好み給ふにより、梅桜をむねとしたる方へ住み給ふ。夕きりを花散里ニ預け給ふ。

玉葛

夕貝の産めりし姫君玉葛、乳母の夫筑紫の少貳ニ成り、妻子、姫君とも引具し筑紫に至り、其後うせにけり。遺言して、「此姫君は京へのぼせ、内大臣に知らせ、公家衆の北の方ニなし奉れ」といふニ、大夫の監といふ人、強て聟になりむかへ取らんとしけるゆへ、少貳の子豊後の介と娘と御供して逃出て京に上り、初瀬にて右近に出で逢ひ、年月のことども語り、泣わらひよろこび、源へ申けれは、喜ひ給ひ、先つ五条の右近が里に移し、其後六条へ呼迎ひ、花散里の住み給ふ所に住せ給ふ。夕きり侍従は、誠のはらからと思し、念頃に聞へかわし給ふ。豊後の介をは昵じき御家人になし給ひけり。年の暮には紫の上と源御覧し分けて、方〻へ正月の御装束配らせ給ふ。空蝉も育み二条に住せ給ふ。

初音

年たち帰り、六条院のありさまいわんかたなし。紫の上の方は春の景色一入すぐれたり。源方〳〵へ渡り給はんとて御装束引つくろい、子の日なりとて、御まへの山の小松を童引き遊ぶ。明石の御方より姫君へひげこに五葉の松付て御哥そへ奉れり。源、「御自筆にて御返し□(聞カ)え給へ」と聞へ給へは、姫君御返しあり。夫ゟ花散里へ渡り給ひ、玉葛へ「年頃おぼつかなくて過しに、かく見るこそ本意なれ。何事もへだておぼすな」と聞へ給ひ、是より明石の御方へ渡り給ふ。双紙ども取ちらして、姫君の御かへしを珍らしと見、御哥かき給ひしを源御覧ずれは、明石恥しう思へり。そこにとまり、曙のぼと(ママ)帰り給ふ。末摘花、空蝉などをも訪ひ給へり。

胡蝶

秋好む中宮の御讀経の始めなれは、紫の上花奉り給はんとて、童を蝶、鳥に出立せ、黄金、銀のか瓶に櫻と山吹をさゝして持せ遣はしける。玉葛へ方〻より文つかわし給ふを、源御覧して、面白がり給ふ。内大臣の惣領柏木中将は、御妹とも知らせず御文おこし給へり。源うはべはおやめき給へと、下心は□(よか)そのものになさんは口おしう思せば、人ごとにさし寄りて、忍びか(ママ)だき心のほどをの給ひ出るに

より、玉葛いかゞせんと侘しがり給ふ。

螢

御方〳〵はみなおもふさまに遊びくらし過ぎ給ふに、玉葛ばかりは源の何かとの給ふゆへ物なげかしう思す。「兵部卿など文遣はし給はゝ、はしたなくもてはなちなどし給ふは有まじき事なり」とすゝめ給ふにより、よき御返しなし給ひしかは、忍びておはしたり。源几帳の帷子引直し、螢を飛せて玉葛を見せ給ひ、兵部卿いとゞ御心にしみ給ふ。玉葛、見馴給はねば、繪ども珍らしう思し、明くれ見給へは、源、「此双紙ニも自らがやうに実なる人はあるまじ。又御心のようニつれなきやある」（ママ）との給ひけり。内大臣は我娘雲ゐの鴈をかやうニせんと思しけるに、夕霧と心をかわし、口おしう思し、「我娘と名のるものあらば告げ知らせよ」と公達にもの給ひけり。

常夏

あつき日、源東の釣りどのに出て涼み、内大臣の公達、柏木中将、弁少将、夕ぎりをしたひて参り給へは、釣殿に呼ひ給ひ、鮎、いし鰹ふしなど料理させ、水漬などきこしめし、夫ゟ玉葛の方へ渡り給ふ。柏木、夕きりなども御供に参り給ふ。此前栽には撫子の外は植給はす。玉葛は誠の親にしられたく思せど、源の夕臥に逢ひ給ひしことあらはれんを思して、まづかくし給へり。此巻に内大臣の御娘と名のる人ありて、柏木の中将呼取り給へど、身のふるまいげに〳〵しくあらす。悔しけれどすべきやうなく、弘徽殿の女房達に参らせ、近江と名つけらる。五節の君と双六など打ておはす様、御遊ひの体も、姫君めかずはしたなき事多かりき。

篝火

此ころ人のことばに、内大臣殿の今姫君とてさたするを、源聞せ給ひ、「籠りおらん女子を善悪のさたするやうにしなすは、内大臣の仕かた聞へぬ」と笑止がり給ふ。玉葛も聞き給ひて、「よくぞしられずなりにし。もしかやうにあらば恥かましからんに」とおぼす。夏の夕、源玉葛に渡り、庭に篝どもさせて、御琴おしへ給ふにかこつけ、近くよりふし給ふ。玉葛、「人の怪しと思ひ侍らん」と侘給へは、さらばとて帰り給ふ。「笛の音聞ゆる、誰そ」と問はせ給へは、柏木の中将なり。夕霧の中将とは従弟どし也。御中よくて、かく遊ひ給ふ。源よび給へは、琴なと□き、御遊ひありしなり。

野分

大風常の年よりも強く吹いでゝ、暮行まゝに吹まさり、格子もおろし、人〻立騒ぐ。紫の上前栽おれかへり、露もとまるまじう吹ちらすを、少し端近くて見給ふ。夕霧の中将参り給ひて、廊下の小障子の上よりのぞき給へは、紫の上けだかく、あたりも匂ふ心地して居給へり。「かくたぐひなき御かたちなれは、源我をも疎くし給ふにこそ」と、猶のぞき給へは、戸・障子吹はなちてあらはになれは、

立退きつゝ、今おはせしやうにもてなし給へは、源「いづくよりぞ」と問はせ給へは、「御祖母大宮の方にさむらひけれど、風いたく吹んと人々申侍りけれは、おぼつかなくて参り侍りたり」との給へは、「大宮すさまじがり給はんに、急き帰り給へ」とて、かへし給ふ。夕きり、あるまじきこと、思ひ給へと、紫の上の面影恋しう思す。

御幸

師走に帝、大原野へ行幸せさせ給ふ。源、玉葛を尚侍になし、宮仕に奉り、里住のほどに我思ひをとげんと思す。内侍は親の氏しだいなれは、源内侍となり給はゝ、藤氏のうじ神の御たゝりあらんと思し、大宮を訪ひニ渡り給ふとき、内大臣に顕はし給へは、驚き嬉しがり給ひ、大宮も御孫と聞給ひてなつかしう思す。玉葛へ御方〳〵より御装束参らせらる。二月十六日、内大臣を呼ひ給ひ、親子の對面せさせ給ひ、御裳着ありけり。内大臣は蛍の兵部卿か髭黒の大将を御聟にとらばやと思せど、「落ぶれおはしけるをかよふニもてかしつき取り立給へは、此上は源の御心次第にせん」と思しぬ。

蘭

玉葛、「御宮仕へして帝の御手もかゝりなば、御姉弘徽殿、秋好む中宮など御心おき給はゝいかにくるしからん」と思す。夕きりの中将は、「はらからと思ひこそすれ、今は従弟なり。思ふ一筋を聞へん」と、蘭の花持て、「源の御使なり」とまうして、御簾のもとへより、空言げに〳〵しくいゝつゞけて、御袖を引うごかし、御哥あり。御返しもあり。柏木の中将は妹としらで文などつかはしたる事、今は恥かしう悔しう思す。十月には玉かつら内裏へおはすべき定なれば、兵部卿の宮、髭黒の大将、左兵衛督などさま〳〵侘て文をこせ給ふ。

真木柱

髭黒の大将ハ三十二三にて、公達もあまたありけれと、北の方物の怪に煩ひ給ふゆへ、玉葛に心を移し給へり。立出なんと日暮に心うき立なから、北の方のどやかにそゝのかし給ふゆへ、行かんとものの給ひかね、小き火とり取よせたきしめ給ふ。北の方物の怪おこり、火とりさつと打かけ給ふ。大将、灰目鼻に入り、騒き給へり。式部卿也聞給ひて、迎ひ遣し給ふ。姫君常ニより給ふ柱に哥よみ、笄にておし入れ出給ふ。内裏に踏歌ありて、玉葛内裏へ参り、帝御覧じ、ねとう思さる。内裏より帰りかけ、髭黒玉葛を引取り給ふ。源は是迄ともすれば玉葛におはして慰め給ひしに、「いかにしてくらさん」と思す。

梅が枝

源の姫君を女御に参らせんとて、薫き物合せ給ひ、御方〳〵よりも取よせ、兵部卿の宮、善悪を極め給ふ。何れも面白と誉め給ふを、源、「心きたなき判者なり」と笑ひ給へり。姫君の書物どもをかゝせ給ひ、

源もさま〳〵御手の風をかへて書尽し給ふ。見たまふ人〻、涙さへ流れそふ心地して、たとふべきかたなし。内大臣は御娘雲ゐの鴈を春宮にと心さしつるに、夕霧の妨け給ふにより入内もならす、ねたく、せめては源念頃に聞へて貰ひ給は、おれて聟に取るべきに、かまい給はす、恨しう思す。源はをさなきどち心をかよはしたる、あながち悪むべき事にもあらぬを、内大臣こと〳〵しく娘を引とり給ふを恨み、貰ひ給はざりけり。

藤裏葉

御妹の入内に夕霧物おもはしくながめかちなるか、内大臣より庭の藤さかりなるに御哥そへ持せ、柏木を御使に遣はさる。夕きり源にしか〳〵と申給へは、「まけんとのことたるべし」との給へは、「さには侍らじ、遊ひせん事に侍らん」との給へは、「いづれにしても早く渡り給へ」とのたもう。御装束つくろひ参り給へは、大臣の北の方もよろこばせ給ひ、御哥などありて、酒宴おはり、雲ゐの鴈の御方へ入れ奉り、御聟になり給ふ。源の姫君の入内に、紫の上にかわりて明石の方御後見し給ふ。姫君の御入内、夕きりの祝言、首尾よく調ひ給ひて嬉しう思す。源今年三十九也。来年御賀の御心あてに、帝・朱雀院も御幸あり。六条院にて御馳走いわんかたなし。

若菜上

源四十に成り給ひ、帝始め御子の方〳〵より御賀せさせ給へり。玉葛御若菜に六条院へ御振舞持参し給へり。朱雀院ハ御ぐしおろし給ひ西山に引籠り給ふ。姫君の女三を源に御預け御後見させ給ふ。源再〻渡り給へは、女房達よき事とは思はねば、妬しげニいふ。紫の上は御かたはら淋しく臥し給へど、恨に思ふべきやと我心をなぐさめ給ふ。朧月夜の尚侍御父の方へ帰り給ひけれは、源忍ひておはし、尚侍うしろぐらき事とは思せと、御心強くえもてなし給はねは、逢ひ給へり。春宮へ参らせし源の姫君、御産なり。皇子御誕生、明石の入道傳へ聞て、「念願満ぬ」と喜ひ、夢に見しこと文に書き、明石の御方へ遣はし、山のおくに籠り給はんとす。

若菜下

六条の新殿にて鞠蹴させ御覧しける。御簾の内に繋きたるから猫喰ひ合ひはい出るに、女三の宮の御姿、柏木右衛門督残りなく見奉りて、いとゞ思ひ給ひぬ。紫の上悩せ給ひ、二条へ移り給ふ。源御訪ひ給ひけるとき、柏木やつれ忍ひ、女三の宮に恨み給へは、人召せど参らず、只わなゝき給ふ。明ゆくほどに少しなぐさめ給ひて、御哥あり。其後柏木よりふみかきて女三の宮へ奉る。源渡り給、とまり、朝がけに帰り給はんとして、しとねの下ニ文あるを御覧して、「かゝることあらんとかねて思ひ、我藤壷をおかせしむくひにこそ」と思す。十二月朱雀院の御賀、試楽に柏木を呼ひ給ひ、御盃の時、源たゞならず御覧しける。柏木は心にしみて人より先へ帰り給へり。

柏木

右衛門督悩みニ臥し給ひ、恥しう心うく、「此侭に死んこそよろしからめ」と思す。文かき、女三の宮へ奉る。御返の哥見給ひて、「此世の思ひ出なれ」と悦ひぬ。女三は此夕御産のけしきあり、若君生れ給へり。薫るの君也。源、「女は人にま見へぬ物なれ、男は人にかくれず、不審に思はん」とくるしがり給ふ。女三は尼ニなり給はんと、御父山の帝に御對面ありて、今は限りと強て奏し給ひければ、源のうときを恨ミ思せと、「おしみ止めて、もし空しく成り給はゝ悔し」とて、切りさげ尼に成し給へり。「ことの心はしらせ給はて、我つれなきやうにおほず（ママ）」と源ハくるしがり給ふ。源、若君を女三の御側へさしよせ、御哥ありしかば、女三ひれふし給へり。柏木江夕きり訪ひけれは、やむくすりならねハ、はかなくなり給ふ。北の方落葉の御事遺言頼み給。

横笛

女三の宮尼に成り給ひし後ハ、山の帝再〻御文遣はし、笋・葷薤に御文・御哥添て送らせ給ふ。夕霧は柏木の北の方を常に訪ひて、笋のことすゝめ給ひ、心ひかれて、秋の夜ふかし侍らんもいかゞと帰り給ふに、御息所笛を出し奉り給ふ。「再〻おはして念頃にの給ふハ唯にはあらじ、下心ありてのことたるべし」と北の方は推量し、憎さに、帰り給ふをしらぬふりし給ふ。夕霧笛ふき給へは、柏木ありし姿にて哥よみ、「末の世長き音に傳へよ」といゝ侍る。北の方、「格子明け給ひしゆへ物の怪入きて若君泣たまふ」と恨ミ給へは、「まろが障子あけずは、物のけえ入こじ」との給へは、恥かしげニ居たまふ。其後六条院へ参り、源に落葉のこと、笛のこと、夢に見へしさま語り給へは、源ハその笛かほるに傳へよといふ事を思す。

鈴虫

女三の入道の宮御持佛堂の供養せさせ給ふ。尼に成り給ひし後は罪ゆるさるゝ心地し給ひ、源もしげく渡り給ふ。秋の頃わたどのゝ前へ虫を放ち、十五夜の月も爰にて御覧し、松虫・鈴虫の声のよしあしを定め給ふ。兵部卿の宮、夕ぎりの大将参り給ひ、源も出給ひ、御琴ともとり〳〵にかきならし給ふ。「松虫は人の聞へぬ所にてはこへをかぎりになき、人しげき所にてはさもあらず。心の隔てある虫也。鈴虫は何心もなく、いづくにても声をおしまず、かわゆらしき虫なり」との給ふ。冷泉院より御使あり、御製あり。御返し奉り、「かく驚かせ給ふも忝し」とて、御遊止めて、打つれ冷泉院へ参り給。院悦せ給ひ、御哥さま〳〵面白あり。秋好中宮へ對面し、帰り給ふ。

夕霧

じつなる人といはれし夕きり、落葉の宮を心にかけぬ。此頃はゝ御息所の物の怪ニ煩ひ給ふにより、小野といふ所に家を持ち給ひ、落葉宮も其西おもてに住たまふ。夕霧参り給ひ、御簾の内へいざり

入、思ひわたる心の内を聞へ尽し給へど、落葉の宮浅ましと思し隠れ給ふを、引とゞめ給へは、裾はがり残れり。其後、律師、御息所に「夕霧の大将落葉宮へ忍ひ給ふ」と遠慮もなく語りけり。迚も立べき御名にあらばと思す。夕霧の北の方は妬み思しけり。御息所夕きりを恨ミ思し、俄に消へ入給ひぬ。落葉を一条へ渡らせ、納戸にまで推し入て、夕霧恨み給へど、かひなし。北の方は「実なる人の心変るは残りなき物」と思あまり、御父大臣の方へ渡り給ひぬ。夕霧驚き給ひぬ。

御法

紫の上年頃弱り給へは、法華経供養せさせ給ふ。御娘の女御（明石中宮）御對面の為め此院へ出給ふ。宮達の中に姫君と三の宮（匂宮也）を取分愛し給ひ、御まへに置奉り、臺の梅と櫻を心とめてもてはやし給とのたまふ。中宮御暇乞に渡り、御手をとり給ふニ、限りと見へ給ひ、明はつるほどニきへはて給ひぬ。源は中さ〳〵心強くもてなし給ふ。夕霧御面影忘れがたく、女房の泣泣の丶じるをしづめ顔にて、几帳より見給へは、きよげニみへ給へり。源は今は御心にかゝるほだしなければ、世を背き給はんと思せど、歎きに思ほれて遁世せしなといはん後のそしり思せは、この程を過さんと思す。致仕の大臣、葵の上かくれ給ひしも此頃なれは、昔を思し出して御哥遣はさる。六条院御返あり。自ら御身のほどをおぼしつゞけ給ふ。

幻

源は紫の上かくれ給ひし明る年、春の光も御心の悲しさは改るべくもあらす、御遊もなく御聖心に成り給て、これ迄好色ふかくさま〳〵心を尽し、紫の上ニ物を思はせ奉りし事思しぬ。宮達にも對面し給ふ事なしたまはす、何かにつきても思し出すことのみ也。唯御孫三の宮を御慰みにし給ふ。二月になれは櫻を三宮見給、「久しく散らぬやうに几帳立らは風吹よらじ」との給ふかほの美さに打笑まれ給ひ、「かしこう思しよりし」と給ひぬ。女三の宮へ渡り、御道心此世をはなれ給ふ事うらやましく御覧す。御一めぐりには曼荼羅の御供養し給ふ。反古ども焼き、導師へ御盃遣はし給ふ。此時源御年五十二三也。匂ふ宮の巻の間八九年ほどなり。

匂宮

源の光かくれ給ひし後、劣らぬ人御一門の中ニなし。御孫の三の宮、女三の宮の産給ひし薫る、かたちなべてならねど、源には及ひ給はず。唯世に類ひあるうつくしさ也。三の宮を兵部卿の宮といふ。紫の上の里の家也。紫の上ニも御孫分なり。薫の事を源冷泉院に申置給へは、取分け思しかしづき、右近中将になし給ふ。稚き時源の御子ニもなしなどいふをほの聞き、いぶかしがり給ひぬ。御母女三もさばかりの御年ニやつしておはすもおぼつかなき事、とかく佛道ニ入てあきらめんと思す。大かたにうつくしけれども、御身のかほり

あやしきまてにほひ給ふ。兵部卿の宮此かほりをらやましがり給ひ、色〻香を集めたしなみ給へは、其侭おなじ御匂ひ也。世の人異名に、かほる中将、にほふ兵部卿の宮と申めてたがりしとかや。

紅梅

其頃按察大納言といふハ柏木のさし次の弟、弁少将といひし人也。本妻ハかくれ給ふ。髭黒の御娘槙柱の君といひしは、源の御弟蛍兵部卿の宮の北の方也。御娘一人まうけ後家に成り、姫君を具して按察大納言の北の方に成り給ふ。大納言の娘、先腹ニ二人あり。当腹には若君一人出き給へハ、姉君をは春宮の女御になし給ふ。つれ子の姫君を春宮の御弟匂ふ宮へと大納言心ざしてほのめかし給ふ。姫君の部屋の庭の盛なる枝を折て、匂兵部卿の宮へ御哥遣はさる。匂ふ宮は色も香もなべてならずとめで給ひと御返しあり。折〳〵文遣はし給へと、誠しう御心には入給はす。殊の外好色ふかくおはしませは、大納言もいかゞと遠慮なり。

竹川

玉葛の御腹に男三人女二人出き給へり。姫君達いとうつくしき取さたあり。冷泉院よりも帝よりも女御に参らせよとの御けしき也。夕霧の三男蔵人少将、この姉君を心かけ給ふ。実なる君なれは色に出て侘給ふ程にはあらず、文遣はし給ふ。此姫君の部屋の庭に美しき櫻あり。御父は姉君、御母は妹君の花と定めの給し事、花の盛に思し出し、かけ物にして碁を打給ふを、蔵人の少将のそき見て、いとゞ思ひあくかれ心を尽す。御父夕霧、「いかにもして嫁にもらはん」と思せど、終に姉君妹君も宮仕ニ出し給。冷泉院御心さし深くて時めき給へは、秋好む中宮、弘徽殿妬み給ふゆへ、苦しがり、里がちに成給ふ。今は「蔵人少将、かをるも聟に取べかりしもの、官位も進みけるに」と玉葛悔ひ給へり。

橋姫

八の宮（優婆塞宮）は御威勢衰へ、北の方もうせ給ひ、姫君二人おはしまし、宇治の山里に移り住み、明くれ御念誦、其辺ニ尊き阿闍利ありて御法文を読説習ひ給へり。薫中将尋ね詣て給ひ、三とせばかりに成る秋、八の宮阿闍利の寺に七日行ひ給へる御留守に、薫中将夜ふかく渡り給へは、姫達御遊ひのさまをのぞき見給ひける。渡り給へると申人やありけん、御簾おろし老人出、「あわれなる昔御物語り侍る」とて、柏木物思ひし事、薫るの生れ給ひし事語り、御預り物とて、薫へ袋ニ上と文字書たるを奉る。かへりて明るもおそろしう見給へは、女三の宮よりの御返し文五六ツ、御哥あり。しみといふ虫のすみかに成て、かびくさきながらあとはきえず、今かきたらんにもおとらねば、「落ちりたらば恥しからん」と思す。

椎本

匂宮と薫は御中よくありけれは、八の宮の姫君の事語り給ふに、匂

宮は好色ニおはせは、宇治へおはし度思せと、軽〳〵しく出給ふこと成がたけれは、「初瀬に願ときの為めとし、宇治に中やどりせん」とて、二月廿日渡り給ひ、御琴・笛などあり。八の宮今薫へ御哥遣はしけれは、匂宮かわりて御返あり。重き御身なれは自由ならねば、花の枝に御文・御哥添へ、姫君へ遣はさる。其後八の宮かくれ給ひぬ。薫きもいり給ふ妹君を匂宮へ奉り、姉君をは我ものにと思せど、聖り心にまうで來りしを、今更此道をほのめかさんもはづかしけれは、色に出し給はす、「御有付の事聞へ給へ」との給へは、姉君親めきて中の君の事を談合し給ふ。匂は宇治へ度〻文奉り給へと、御返し稀なれは、「薫にはかくはあるまじ」と思す。薫、我行てさへにと思す。

総　角

八の宮の御一周忌の御吊の事、阿闍利、かほる取持きも入給ふ。御吊のかざりに成る総角を姫君達拵へ糸くり給ふを、几帳のかげに見て、薫御哥あり。返しあり。御有付の事を弁ニもふし給へは、「妹君をかほるニ参らせ、姉君は親に成て後見しましたき御心也」と語る。薫は妹君ニ匂を逢せ奉らんと、同車して逢せまいらせけり。姉君は薫る入給ひけるときかくれ給ひぬ。其後、姉君は匂宮の御身の自由ならねど、心の外に打絶へ給へぬらんとくるしがり給ひ、煩ひ給ひ、遂にはかなくなり給ひぬ。薫、「此ま、に虫のからなどのやうに成し見るわざも哉」と思す。御忌みに籠り、なが〳〵出給はねば、匂宮のおぼつかなく思さんといとおしみて、母后二条へ妹君をむかひ給はんことゆるし給へり。

早　蕨

中の君妹姫は姉君のかくれ給ひし明る年の春の光を見給ふも、同じ心にいひかはしてこそ慰めつれ、おくれてはと思す。阿闍利今蕨・土筆を籠に入て哥奉りぬ。御返しあり。匂宮、近き程に中の君を二条へ迎へん事を薫に語り給へは、わがあやまちのやうに姉君ニ恨みられくるしう侍りしにと悦ひ給へり。中の君、宇治を出んもいかにと思せと、かく過し給ふにもあらねば、其拵ひし給へり。弁は姉君の歎きに尼になり、此度の御供に思かけねは、姉の手道具なととらせ給に、童の泣よふニ涙に溺れけり。御車よせて御供多くかしづき出給ふ。はげしき山道見給ひ、匂の宇治へうとかりしも理りと思し、御哥あり。おはしつきぬれは、目もかゞやくばかりの家造り、匂も待おはし、おろし奉り給ふ。「かく定り給は大かたにはあらじ」と世の人心にくゝ思へり。薫嬉しけれと、我ものニせざりしは悔しと思す。

宿　木

其頃の藤壺女御の御娘女二の宮を、帝、かほるニ預けんと思し、菊をかけ物ニし給ひ、御哥あり。身ニとりては面目なれど、嬉しと思さず。夕霧聞き給ひ、「帝さへ女の子はうしろめたしとて聟をもとめ給ふ。まして唯人などはゆだんすべきにあらず」とて、匂を聟ニと

定め給ふ。中の君は聞給ひて、数ならぬ身なれはなげき給ふ。五月よりたゞならぬ御身ニなり給ふ。匂は珍らしき方に御心ざしまさり、中の君へ渡り給はず。中の君、宇治へ帰らんと思すれと、かほる、「匂ニ申給ひてさもとの給はゝ送り参らせん」と申けれは「一筋に匂ニ頼み聞へめ」と思。薫、八の宮の北の方の御姪中将の君の御娘浮舟姉君ニ似たりけるを聞給ひ□、其後見給ひ、なつかしう思し、「かたみに見んと浮舟の母に内〻語れ」と、弁にの給ひし也。中の君、若君を産給ふ。

東屋

浮舟を左近少将といふ人に約束したる処、母のつれ子と聞き、常陸守が本娘をといふニより、北の方口おしうて、中の君ニ預けたきと申、つれて行ける夕方、匂宮渡り給ひ、中の君は御ゆどにおはせし内、こゝかしこうそむきありかせ給ふに、浮舟を見給ひ、例の色こき御心にて、そばへさしより、「誰そ。名のり給へ」とて、はなし給はす。めのと随分に隠し忍に、「こはいかに」と引退んとす。さがなき女と引つめり給ふ。其内、后の宮御心ち悪しとて、内より御使参り、すべきかたなく出給ふ。北の方聞、肝つぶし、つれ帰り、三条わたりの小家に置けり。薫は弁の尼に聞給ひて、三条へ渡り、車に乗せて宇治へつれ渡り給ひ、京へは「御堂の経佛の事なとにて慎むべき事侍る」との給ひ遣はし、打とけておはしける。

浮舟

匂宮、浮舟の宇治に薫の住せおきけるを大内記といふ御家人をかたらひ、忍びておはして、芦垣より入りのぞき給へは、浮舟手枕して灯をながめたたるを□覧じ、帰らんとしたまはず、薫の御こゑをまねび、入給。先に相ひ見給ひし時のことつゞくるにぞ、浮舟ハ匂宮としれど、せん方なく、夜明る程に帰り給はす。「今かへりては死ぬべき心ちすする、かくし給へ」との給ひ、御志さし尽し給へは、浮舟移りける。其後再〻渡り給ひ、小舟に乗せて、めのとの伯父因幡守の方につれ行給ひ、又舟にてかへり給ふ。薫、卯月十日京へむかへんと思す。匂、三月晦日ぬすみ出さんと定め給ふ。浮舟つく〳〵と川おとき□、「身を捨ばや。ながらへては恥かし」と思ふて、夜昼羊の歩ミよりもほどなき心ちしてあかしくらせり。

蜻蛉

宇治には浮舟行衛□しらす成にしかば、人〻騒き、母君もあきれなき給。「匂の御事に付物おほしたれば、身をなげ給ひしにや」とて、「死骸もなきは人ぎゝもあし」とて、装束を車に入てやかせけり。薫、右近に問せ給へは、「中君の御方にて匂御覧し、其後二三度御文取かわし給ひしばかりにて侍る。御まへより心得ぬ御文を参らせ給ひしかば、かく思し侘てかくならせ給」といふ。御吊ひ念頃にし給ひ、母君に念頃に仰遣はしけり。匂宮、御姉の一品の宮の御伽に置

給へる式部卿の宮し薫の御伯父の御娘、宮の君といふに心をかけ給ひけり。薫は思ひ〳〵、はてには、「大君おはしまさば外へ心を分けんものを」とおほし、夕暮に蜻蛉の物はかなげに飛そらを御覧して御哥あり。

手習

其頃横川に何某僧都とて、八十餘の母、五十ばかりの妹あり。初瀬に詣て、帰りに宇治の院に入けり。僧都、「人住ぬ所にはよからぬけだ物住むもの也」とて、爰かしこ火ともし見るに、森の下にあてなるさまの女泣きひたり。僧都祈りて本性に成り、「我は思ひくらし、身を投んとてすのこのはしにありけるに、きよけなる男きて抱きし心地せしか、無性になりし」と語る。此女、浮舟也。僧都妹つれ帰り、「娘生帰りし」といとをしがりやしのふ。浮舟は思ふ事語る相手もなければ、昔の事恋しき折は手習しおりぬ。其後尼になりぬれは、心もはれ〳〵しうなりて、碁なと打てあそぶ時もありけり。薫、浮舟の事を聞給へど、今は呼ひかへすへきものとは思ひ給はねど、母明暮歎くも不便なれば、母に告んと思。

夢浮橋

薫は叡山へおはして経佛なと供養せさせ、又の日横川に立寄り、僧都に対面して浮舟か事尋ね給ふに、疑もなし。御供に召連し浮舟か弟小君をよび、文遣はし給ふ。「いわんかたなき心の程は僧都に思ゆるして、又對面せんと思ふも、我ながらもとかしき心と思」など書て、御哥あり。浮舟隔てきこえてかくすとの給ふ程に、よろづに思ひ出せど、「さらに覚えたる事なし。いとゞあやしき事ども、心乱て悩し」とて打ふし給へり。小君、稚きなれは、「是非對面してあきらめん」ともえ聞へず、空しく帰り薫に申せば、中〳〵ありしにもまさりておぼつかなう思せしと也。

此巻に夢の浮橋とかける所なけれど、桐壷に「いづれの御時」とおぼ〳〵しくかき出し、又此巻のはていぶかしう書捨しは、ひとへに夢の浮橋の如くと思ひて号しにや。

天保十二丑のとし後の正月　　むめ園の主しるす

本書「夕顔」（左面が梗概書写部分）

本書巻末（右面が梗概著者の奥書）

Genji-hitotoki-banashi (A Digest of *The Tale of Genji*): A bibliographic commentary and its reprinting

Yoshinobu SENO

An archived book titled *Genji-hitotoki-banashi* (“A Digest of *The Tale of Genji*”) was created in a unique way. Originally, the book was published in 1837 with the title *Genji-monogatari-e-zukushi-taiisho* (“Illustrated *Tale of Genji*”). The book was bound with one handwritten manuscript page inserted between each of the pages of the book. That is, when turning the pages of this book, there is one single printed page, followed by one handwritten page, and so on. Originally, this book had one chapter of *The Tale of Genji* assigned to one page, in the form of an illustration of one scene in that chapter, together with only one of the *waka* poems found in that chapter. The handwritten text inserted here presents a summary of the chapter found on the previous page on its front side, and a summary of the chapter found on the next page on its reverse (back) side. With this format, with the book open to two pages, one sees simultaneously an illustration of each respective chapter of the Tale and one representative *waka* poem, plus a summary of that chapter. The summary for each chapter is written at around 250 Japanese-text characters, with the storyline of the long *Tale* aptly summarized in compact form. One learns from a postscript at the end of the book that this was written by a person in 1841 named Umezono no Aruji. It is surmised that the additions to this book served to make the contents more suitable as an introductory text for *The Tale of Genji*, and was perhaps given to a young girl familiar to said person.